

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

不登校 50年

証言プロジェクト

学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐって、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしく願います。

全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林一男、加藤敦也、佐藤信一、

須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子

関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

#15 山田廣子^{さん}

(やまだ・ひろこ)

1943年、山口県下関生まれ。1962年に大洋漁業へ入社し、1968年に退社、その翌年に結婚して1971年に長男が、1974年に長女が生まれる。1986年、長男が高校1年のときに登校拒否し、1989年に高校を退学。1990年に親の会「下関虹の会」を発足。1991年、長男は東京へ。同年、「下関虹の会」の代表になり、現在にいたる。

インタビュー日時：2016年10月29日

場 所：ご自宅（山口県下関市）

聞き手：奥地圭子、木村砂織、山口幸子

奥地 親の会を立ち上げられたのは何年ですか？

山田 1990年1月です。

奥地 ちょうど登校拒否を考える全国ネットワーク（現在はNPO法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク）を立ち上げた年といっしょですね。全国ネットワークのことは、すでにご存知でしたか？

山田 知っていました。主人といっしょに東京で開かれた合宿に行って、主人が「父親が語る不登校」というシンポジウムに出させていただきました。内容はとても深刻な話なのに、みなさんそれを笑いに変えていて、とても盛り上がりましたね。その主人も2009年に亡くなりましたけれども。

高校で不登校に

奥地 そうでしたね。お子さんは、何年ごろから学校に行かなくなったのでしょうか。

山田 1986年で、高校1年生のときでした。ただ、その以前にも、小学校5年生の3学期に、1カ月ほど行かなくなったことがありました。そのときの担任は50代の女の先生だったんですけど、すごい厳しい先生でね。息子は学級委員をしていたんですが、先生にとつてよくないことがあるたび、クラスで何かあるたびに、息子に「あなたのせいだ」と言っていて、すべて息子が悪いように言われていたんです。それで、理科室には鍵がかかるんですが、先生がそこに入って泣くと言っています。そこに息子が行って謝るわけですね。「悪かったです、悪かったです」って。そうこうしているうちに、息子のほうが学校に行けなくなってしまいました。息子は「僕が悪いせいで先生がいつも泣いてしまう」と言っていました。

休んでいるあいだは、同じ団地に住んでいた同級生の男の子が、パンとか宿題を持ってきてくれていました。それで、その持ってきてくれる荷物のなかに、3学期の終わりごろ、「何でもいいから先生のことについて書いてきなさい」という用紙があったんです。全

員に配られたものなのか、息子だけに渡されたものなのかはわかりませんが、私は、たぶん書かないだろうと思っていたんですが、息子は「書く」と言って、自分がしてほしくないことを簡条書きにしました。「理科室に入ってすぐ泣くようなことはほしくない」「とか「授業中に机のイスを外に出して、教室で床に座らせたりしないでほしい」とか10項目ぐらい書いて、それを学校に持って行ったんです。

奥地 床に座らせるというのは、ひどいですね。その用紙を学校に持っていったのは本人ですか？

山田 本人が持って行ったんです。それから学校に「行く」と言って、行くようになったんですね。

奥地 それは勇気がありましたね。

山田 私のほうは、「ヒステリックな先生だから、これはひどいことになるぞ」「また親が呼び出されるな」と思って覚悟をしていたところ、案の定、呼び出され

山田 まるでわかりませんでした。1986年当時は、周囲には不登校の子どもなんてまったくいなかったんですね。誰にも打ち明けられない状況で、もう、ほんとうにつらかったです。主人も遠洋漁業の船に乗っておりましたから家にはいませんでしたし、ほんとうに一人で孤立して言うか孤独って言うか、ぜんぶ自分で背負いこんでしまっていました。主人は1年間ずっと家にいません。戻ってきてても、また2カ月ほどで出てしまう。長いときは1年半ぐらい出たきりです。主人のいないあいだに、誕生日を2回迎えたこともあります。そんな感じですから、息子が小さいときなんて、主人のいないあいだに大きくなっちゃって、会っても「どこのおじちゃん？」という感じでね（笑）。

奥地 当時のことだから、携帯もメールもないですものね。手紙は届いたんですか？

山田 手紙は出せたんですが、本人に届くのは3カ月ほど経ってからで、その返事が届くのがもう半年後ぐらいになるので、そのころには「ええっと、そんなこ

たんですが、ところがどっこいですね、先生のほうが「いろいろ反省せんといけんところが私にあります」と言われたんです。怒られると思ってはいたんですが、反対にしょぼんとされて、それから「実は……」と、自分の子育ての悩みごとを話し始めたんです。具体的な内容は省きますが、そのイライラが子どもに行っていたんだろうと思います。

まあ、そういう経過があつて5年生は終わって、6年生は休まずに行きました。中学校も何とか通っていました。高校は自分が希望して、中学のときの剣道部のお友だちも「いっしょに行かないか」と言ってくれて、本人も納得づくめで行った県立高校だったんですが、5月の連休明けからパツタリ行かなくなりました。それからもうずっと行かなくなつて……。

理由はまるで わからなかった

奥地 お母さんから見て、不登校の原因や事情は、どのように思われてましたか？

と書いたっけ？」っていうような具合でした（笑）。

でも、本当に救いだっただのは、主人が、ただの一度も私を責めなかったことです。

奥地 それは、すばらしいですね。

山田 ほんとうにね。亡くなったから、すばらしいところだけが見えるのではなくて、私は生前から常に主人のことをほめていました。友だちからは「また、あなたノロケ言うてから」って、よく言われました。主人のことで悪く言ったことはないですね。

奥地 親の会では、お父さんがなかなかわかってくれないという話がほとんどですよ。

山田 そうですね。まず主人が大変、それから自分の父、母、お姑さん、舅さん、兄弟、地域の人……。たがいは、理解しない大変な人がまわりにいる。そういう話を聞かされて、いつもいっしょに涙するんですが、ご主人に肩書がある場合は（先生と名のつく弁護

士とか教師とか医者とかね)、とくに難しいなって思います。やっぱり社会的な地位のある人は「学校も出んでどうするか」って言いますね。

奥地 そうね、体面を気にされるからね。

山田 体面をね。そういう点でも、主人はただの一度も私を責めたことがなくて、むしろ協力的でした。1990年に全国ネットワークができて第1回の大会が開かれたときも、主人から「よし行こう」って言うてくれたんです。

「乗り切る会」から 「虹の会」へ

私たちの会は1990年の1月に立ち上げたんですが、最初は、実は「登校拒否を乗り切る会」っていう名前でした。

奥地 そういう名前だったの(笑)。

そしてあるとき、「電話をするときに、こちら登校拒否を乗り切る会の何々ですが」とは名乗れん」という意見があがったんです。「もし方が一、本人が出たときにまずいじゃないか」って。

奥地 そうね。「乗り切る会」なんて本人を否定しているみたいですね。

山田 私も「名前を変えたほうがいい」と言いました。それで、新しい名前を次の例会(1990年6月)までにみんなで考えようと決めたんです。でも、その先生が「名前を考えた方は？」と聞いたら、ほかに誰もいなくて、私ひとりが「はい」って手を挙げたんです。それで「虹の会」という名前を提案しました。なぜ「虹の会」かと言うと、そのころ山下英三郎さんの『虹を見るために——不登校児たちの伴走者として』(黎明書房1989)という本を読んでいた

*1 山下英三郎(やました・えいざぶろう)・1946年、長崎県生まれ。1986年から埼玉県所沢市において、日本で初のスクールソーシャルワーカーとして実践活動を行なった。

山田 最初のきっかけは、お二人の子どもさんが不登校になった親御さん(現在も虹の会の会員)が、ある中学校の先生のところ相談に行ったことだったんですね。その先生は「そりゃいけんなあ」と言っていて、大阪の工業高校の方を講師に呼んで講演したんです。1989年11月でした。そのお知らせを新聞か何かで見て、私も行ったんです。会場はいっぱいでした。その後、「下関にも親の会をつくるので、気持ちのある方は残っていただけませんか」というような呼びかけがあって、私も残ったんですね。

奥地 「会をつくりたい」っておっしゃったのは？

山田 その中学の先生です。とりあえず翌年1990年1月に向けて立ち上げようという話で、大阪に「登校拒否を克服する会」があったので、それにあやかって「登校拒否を乗り切る会」になっちゃったんですね。その先生は大阪とつながりがあったんです。そこに、いろんなお医者さんが来られたりしてたんですが、その方たちの言われることは、やっぱり何かおかしい。

んです。そのあとがきには、こう書いてありました。

学校へ行かない(行けない)ということ、一人で雨に打たれているように感じる子どもたちがいるとすれば、私はとりあえず、一緒に雨に打たれてみたい。そして、共に虹を見るために歩み続けたい。

(中略)

晴れた日ばかりでは、虹を見ることはできない。厳しい季節のあとには、色彩に満ち溢れた春の訪れがある。つらいことや苦しみを味わうことによって、私たちは優しさや思いやりを身につけることもできる。だから、私は進んで雨に打たれよう。雨の後に、虹が見えることを信じているから……。

私は「これだ！」って思ったんです。それで、この文章をみなさんの前で読んで、その先生が「みなさんどうですか？」って聞いたなら「いいです」ってみんなが言ってくれて、あっけなく決まりました。そういうことで、半年間ぐらい「登校拒否を乗り切る会」だったのが、6月から「下関虹の会」になりました。

そして、その年の8月に東京で開かれた全国ネットの第1回大会に参加したんです。渡辺位さん（児童精神科医・1925―2009）が講演をされていたんですが、主人も私も「わからんね〜。日本語かね」って言うっていました。あんまり深いお話だから、わからなかったんです。「猫の話はいいから本題に入っちゃよ〜」ってね。「猫の話が大事なのに」って、娘と今日もその話で大笑いしました。その後、渡辺位さんは、2回ほど虹の会でお呼びしましたし、各地で講演されたときに10回以上お話を聴いて、ようやく渡辺さんのお話が理解できるようになりました。

奥地 第1回の大会で「父親が語る登校拒否」のシンポジウムにご主人が出ていただいたときで、お子さんが不登校されて何年経っておられたことになりますでしょうか？

山田 1986年からなので、4年ですね。高校は留年になって、次の年も最初の1日だけ行ったけど、2日目から行かなくなりまして。その後は、まったく

んでしょうね。

山田 私もストレスがたまっていて、カーッと頭にきたときは、2階のあの子の部屋から、教科書や何か、ボンボン下に物を投げ落とししたり、いま考えたらひどいことをしました。そうしたら、バリケードを張られてね。息子の部屋の中に入らせないようにされました。そして、2年目に精神科医を紹介されたんですよ。

薬なんか飲ませないと

思っただけでも……

奥地 学校の先生から？

山田 2年目の担任の先生からです。その当時から、絶対に精神病院なんかに行くようなことではないというの、わかっていました。でも、そうは言っても、担任の先生には無下に逆らえないと思って、義理で行くだけ行こうと思ったんです。「行きました」って言えば先生も安心するかと思って。それで医者に「昼夜逆転している」とか正直に状況を話したら、「それ

一度も行きませんでした。1年の担任だった山田先生は、毎日、家に来てくれました。私も主人はいないし、すごく不安だったので、先生に来てくれるよう、頼み込んだんですね。いまから思えば、息子には、ほんとうに申し訳ないことをしたと思っています。

奥地 お子さんはどんな気持ちだったかよね。

山田 とんでもないことですよ。先生が来られるたびに、2階にいる息子の名前を呼ぶけど、絶対に出てこない。でも、あるとき先生が突然来て、たまたま息子がこの客間にいたんです。

奥地 この部屋は、玄関のすぐそばですね。

山田 そうしたらどうしたと思います？ カーテンに、身体をグルグル巻きにして、身を隠したんです。

奥地 姿を見られなくなかったんでしょうね。まだそのころは、親もどうしていいか、よくわからなかった

じゃ、社会人になれません」「薬飲ませんといけん」とか、延々と言われました。私が「息子は薬なんか絶対飲みません」と言うと、「それはお母さん、頭を働かせなさい」と言うんですね。つまり、薬をご飯に混ぜるとかジュースに混ぜるようになっていきました。

奥地 昔は、こっそり薬を混ぜて飲ませることも、よくありましたね。病院はお母さんだけが行かれたんですか？

山田 息子は絶対に行かないですから、私だけで行きました。それで、とりあえず「はいはい」と言っていて、いちおう薬をもらって帰ったんですけど、やっぱりね……揺らぐんですね。「絶対、何を言われても、薬をもらっても飲まずものか」と決心して、「ただ義理で行くだけだ」って自分に言い聞かせて行ったにもかかわらず、帰るときには「本当にそうなのかな」「社会人になれるのかな」って揺らいじゃってね……。

奥地 不安になっちゃうんですね。

山田 そうなんです。それで、大分で小児科医をされている矢野英二先生に相談しようと思って、電話したんです。矢野先生は、下関の「子どもの広場」という子どもの本を売っている書店によく来られていたんです。そこでお話をうかがっていて、不登校に対する姿勢はちゃんとされていたので相談しようと思ったんですが、もう、けんもほろろ、ものすごい勢いで怒られたんです。「今まで何を勉強していたんですか!」「あれだけ、いろんなこと勉強されてきて、山田さん、薬を飲ませるだ何だってどういうことですか!」って怒られて、「うわー、ほんとうにそうだ」と思って、「わかりました」と言っただけ、電話を切ったんです。それで薬は捨てました。

後日、矢野先生と下関でお会いしたとき、矢野先生は「山田さん、あのときはひどい口調で言うて、すまんやったけど、目と目を合わせている場合とちがって、電話越しでは、あれぐらい強く言わないと、やっぱり揺らぐと思っただけ。ありったけの声をふりしぼって言ったから、驚いたやろう」って言われたんです。

人前に出てしゃべったり文章を書いたりが一番苦手なもので、「できない!」って。

でも、主人は「じゃあどうするんだ」と言うし、中学の先生も「実務的なことはとにかく、外面の代表の名前をやっぱり決めんとまずいから、山田さんなっておくれよ。あとはずぶん私がします」と言うので、「まあ、それならしょうがない」と思って、代表になりました。そうしたら、その先生が亡くなられたので、もうショックでした。

くわえて、主人が「月に1回の例会では少ない。もう1回を家でやれば?」と言ってきたんです。

奥地 それはすごいね。

山田 主人は「うちの家だったら、子ども連れてきてもいいし」と言うので、その後、10年ぐらい、この部屋に親が集まっていました。子どもは子どもで2階で遊ばせてね。息子の部屋にはマンガ本もたくさんありましたし。

私も「すいません、もうよくわかりました。一度も飲ませていません」って言いました。

会の代表に

虹の会の代表は、最初の1年間は別の方がされていて、私は何もしていませんでした。でも、その方はご主人を亡くされたので、会が2年目のころ、「自分はやっぱり働かないと、子どもも2人いて、食べさせていかんといけないので、代表を降りたい」って言ったんです。それで、その中学の先生に「お願いできませんか?」って言ったたら、「自分には引き受けられない事情がある」と言われて、その先生は1992年にガンで亡くなられたんです。9月26日が命日なので、毎年、命日には娘と二人で拜ませてもらっています。会を最初につくられたのはその先生です。私はその恩は忘れたいけないと思っただけです。それで、主人が私に「おまえが代表をやれば」って言ったんです。私は「とんでもない!」って。私はそんな器ではない、内助の功の役割はできるけれども、

奥地 じゃあ、ちょっととした居場所になっていたんですね。

山田 そうそう。そういう感じで10年ぐらいはやっていました。最初のころは100名近い会員さんがいたんです。集まるのは20人ぐらいですけどね。だけど、じよじよに少なくなっていくって、いまは細々とやっています。

たいへんなのは学校

あるとき、家で会を開いているところに、NHKの方が来られたんです。そうしたら開口一番、息子がこう言っただけです。

「僕はこの家で、家庭で守られている。いま学校へ行っている子どもたちは、たいへんな状態で学校に行っている。ほんとうにたいへんなのは、学校に行っている子どもで、家にいる僕は守られているから、どうもないんだ。だから学校のほうに取材に行ってくれませんか。僕は何も言うことありません」

それは忘れもしないですね。

奥地 すばらしいね。

山田 ほかに、息子には、親の会とか講演会の際に、質問に対して応えてもらうようなことをしていました。かならず出る質問は、「どうして学校に行かなくなつたんですか？」ですね。息子は「自分でもわかりません。ただ、しいて言えば、学校の校門に入ろうとしたら、何か莫大な、大きなものが自分に覆いかぶさつてきて、息苦しくなつて、すごく何とも言えない気持ちになる。息苦しくなる」と言っていました。

それから、ある講演会で先生方もたくさん来ているなかで、そういう質問が出たときは「原因はわかりませんが、あえて言えば、学校というところで人間を5、4、3、2、1とランク付けするというのが僕はどうしても許されません」と言ったの。そのとき、私は「穴があつたら入りたくないな」と思ったの。「先生方がたくさん来ているのに、ひどいことを言うな。やっぱり、少しおかしいなと思われたらう」と思ったのね。そ

るで子どもじみていて、こんな人から自分は習う必要はないと思つた」

最初のころは、そういうことを大勢の前で言われると、私はもう、困っちゃいました。でも、大田堯先生の講演を聞いて、息子はすでに気がついていたんだなと思ひました。

奥地 息子さんは、高校2年目以降はどうされたんですか？

山田 3年目になつて「もう辞める」と本人が言いま

した。

劇団に入つて

奥地 学校に行く意味を考えちゃつたのね。

山田 そうですね。それで20歳になつて半年で東京に旅立つたんですが、それまでは、高校の教師になりた

れほど学校信仰が私の中で根深かつたんです。それがね、2014年に埼玉で全国大会があつたとき、講演会で、奇しくも大田堯先生（本プロジェクトインタビュー#05参照）が同じことをおっしゃつたんです。私は息子が何十年前に言ったことを思い出して、尊敬する大田堯先生が息子と同じことを言われるのを聴いて、「今日はほんとうにうれしかったです」と、会場で言いました。

奥地 息子さんは、本質的なことをわかつていたんですよね。直観力も優れているし、それを大勢の前で表現できるし、お子さん自身が自分を持っていたということですよ。そこがすごいですよ。

山田 息子には、ほんとうに、いろいろなことを教えられました。もう一つ、こうも言っていました。

「学校の先生は、その日によつて機嫌が悪かつたり良かつたりする。それは教室に入るときにパツとわかるんだ。機嫌が悪いときは、たぶん家で何かいざこざとかケンカとか、何かあつたな。大人である先生が、ま

に小倉の予備校に手続きに行つたんです。でも、小倉から帰つてきて、急に変わったんですね。「予備校には行かない。あるちがうことをやる。でも、それはまだ言えない」つて言うんですね。それで、ある日突然「ちよつと東京に行つてくる」つて言うんですよ。「何とかね？」と聞いても「はつきり決まるまでは、ちよつと悪いけど絶対に言われぬ」と言つて、東京に行つて帰つてきたんです。そして、1カ月ぐらいつて東京から電話がかかつてきたんです。

それで、「劇団健康*2」という劇団に入つたんです。KERAさんという方が主宰する劇団で、ちよつと福岡へ公演に来ていたんです。そこで息子が製作者募集というチラシを見て「よし」と言つて行つたんですね。先方も「自分の劇団は貧乏でお金がないので汽車賃も出せないが、それでいいか？」ということ。

私も、東京へはついていかなかったです。自分で不動産屋さんに行つて、下北沢の、家賃3万ぐらいの、

*2 1985年、バンド有頂天のボーカルだったKERAさんを中心に旗揚げされた劇団。田口トモロヲさんも参加していた。92年に解散し、93年からは「ナイロン100℃」として活動している。

安くて古い風呂もトイレも共同の下宿に決めて。私は布団だけ送ってね。

奥地 劇団に通ったの？

山田 そうですよ。それで猛烈にがんばったけどね。何年目かで辞めて、独立してわけじゃないけど、いままも演劇には関わっていて、自分で脚本書いたりとかしているようです。

奥地 いま何歳になられたんですか？

山田 45歳です。いま、いっしょに暮らす彼女もいて、やりたいことをやっているみたいです。

「はい、さよなら」は絶対にできない

奥地 親の会を始めたきっかけは、ご自分のお子さんの不登校だったわけですけど、お子さんが自立して暮らすようになってからも、ずっと虹の会をやってこら

貧乏なんだろう」と思ってましたけど、貧乏で生まれただことに、年が経つにつれて感謝しています。すごくよくなったって。

だから私は、自分のパートナーを選ぶときは絶対に貧乏人を選ぶと思うたの。なぜかと言うと、金持ちの人だったら絶対に合わないだろうと思ったんです。おたがい貧乏で育っていたら、貧乏人の苦しみや、人の優しさがわかるから。そうしたらほんとうに的中して、主人は貧乏人だったんです。貧しかったから、自分でアルバイトして高校まで行って、船に乗ったけど、いつまでも下積みだからと言って、船から上がって、自分でアルバイトしたお金で大学に行って、そこで勉強して免許を取って大洋漁業に入社して、私と出会って結婚しました。

奥地 なるほど、なるほど。話を戻すと、虹の会を続けてこられたのは、ご自身がすごく孤立してつらかった経験があって、ということでしたね。

山田 話が飛んじやって、すみません。そんな苦しみ

れたわけは？

山田 よいところを聞いていただきました。それはですね、息子の不登校時代、ものすごく私自身が孤立して、孤独でつらくて苦しくって、関門海峡に息子と身投げしたいぐらいの気持ちだったんです。

私は学生時代はほんとうに生真面目な生徒で、町で教師に会ったときには立ち止まって、最敬礼して、「先生こんにちは」と言っていたくらいです(笑)。

奥地 戦後すぐですよ。

山田 小学校入学が昭和25年です。小学校4年から、私は100円持って、手編みの買い物籠をさげて、夕飯のおかずを買いに行ってたね。家が貧しくて、両親とも働いていたから、自分でおかずを買ってきて、七輪に火をおこして、でも消し炭がないと火がなかなかおこらない。消し炭がなかったら涙が出てきてね。その時代でも、子どもが「ただいまる」って帰ったら、おやつのある家もあったんですよ。「うちは、どうして

があったものだから、自分の子どもが不登校でなくなったからと言って「はい、さよなら」は絶対にできないと思っただの。自分と同じ苦しみを、ほかの親御さんに味わってほしくなかった。ただ、私の場合、主人はつらくあたらなかったから、そこは別問題ですけど。

奥地 ほかの人はそうでもんね。

山田 そう。もう、ほんとうにすさまじい。相談者の方といっしょに泣いてしまいます。「こんな嫁もらうんやなかった」と言われたとかね。その方は医者のお奥さんでしたけど。そういうことを思うと、やっぱり、さっさと逃げるわけにいかんって思ったの。防波堤というか、私は残って、いっしょにやるべきだと思いましたが。不登校を正しく理解してもらわないと、子ども自身も不幸だし、母親も大変な状況ですからね。渡辺位さんは、学校に行かなくなったら、子どもが犬や猫になるのか(犬や猫に失礼だけど)って、よく言われていたけど、そういう社会の異常な状態を、少しでも地域の人たちにわかっていただききたい。そのために

は、すばらしい方を呼んで講演をして広げたいと。不登校を正しく理解していただくように広めたいという思いがすごくありました。

ただ、自分の弱点は自分がよく知っているものですから、誰か次の代表になる人と思って目星をつけるんですが、みんな子どもが巢立つと「お世話になりました」って辞めていくんですね。もうがっかりですよね。でも反面、とてもうれしいことでもありますけれどね。それで、いつか、奥地さんに講演に来ていただいたときに……。

奥地 会を辞めようかってね、相談があった。

山田 相談しましたね。そうしたら、「いいじゃない。あなたがやって、やれなくなったら、もうそのときは虹の会を辞めた方がいいじゃない。だから、あなたがやれるまでやったらどう？」って。ふつうだったら「そうよね。がんばって後継者を決めなさいよ。ここがつぶれたらどうするの？ 責任を持って、ちゃんと後継者を決めなさい」って言うと思うんです。私も、

そのとき相談させていただいた子というのは、進学校に行っていて、すごく頭がよかったです。あのときは高校2年だったんですが、虹の会につながつきかけは、おばあちゃんが虹の会のこと載った新聞記事の切り抜きを持っていったんですって。「うちの孫がもし登校拒否になったらここに行かせよう」と思って。そうしたら、ほんとうに不登校になって、まずはおばあちゃんが相談に来られたんです。その次にお父さんが来て、その次に、お母さんと息子さんが来ました。お母さんが先に帰って、私は息子さんと一対一で話したんですが、すばらしい息子さんでした。

彼は、「おばちゃん、いまが地獄だ。社会に出たら、もつと地獄なんじゃないか？」って言ったんですね。私は「いや、そんなことない。いまが一番たいへんだと思う」と言ったのね。そうしたら、「おばちゃん、この地獄から逃れるにはどうしたらいいでしょうか？」って言うのね。私も涙してね。「学校と関わり合いのあるものを、ぜんぶ身の回りからよけてみたら？ 24時間、あなたの好きなように、朝から晩まで寝ようが、テレビ見ようが、パソコンしようが、マン

相談する前には、そう言われるかなと思っていました。でも、反対のことを言われて、奥地さんは大物だと思いました（失礼な言い方でごめんなさい）。それから、ずいぶん楽になりました。

奥地 いつでも辞められると思ったら。

山田 よけいに、ますます元気になって（笑）。

奥地 別のときに相談していただいたことで、ある矯正施設が、フリースクールを名乗っているけど、そこに行ったら1杯数千円の水を買わなきゃいけないとか、子どもが逃げ帰ってきていて、それをお母さんが連れて行くこうとしているとか、すごい怖い犬がいて、脱走した子どもを追っかけて来るとか、話されていましたね。そこは、今も活動しているんでしょうか。

この地獄から逃れるには

山田 今もあるかなあ……ちよつと、わからないです。

が読もうが、ほんとうに学校のことを忘れて、自分の好きなことをして過ごしたらどう？」って言ったの。「そうしたら地獄から逃れられるでしょうか？」って聞くから、「たぶん逃れられるんじゃない」って言ってね。彼は「自分の苦しみで、大人でいっしょに泣いてくれたのは、山田のおばちゃんだけだ」って言うてました。

その子はね、優しいんですよ。だから、親がキリスト教に行ったらキリスト教に、仏教に行ったら仏教に、新興宗教に行ったら新興宗教にという具合で、とうとう、そういう変なところにあずけられたんです。でも、苦しくて脱走して、ところが、そこでは犬を5〜6匹飼っていて、犬に追わさせて嘔まさせたんです。それを聞いて腹が立ってね。ほんとうに、そのことを思うと涙が出ます。ずうっと、つらいことをさせて、あの子がかわいそうで……。

奥地 ほんとうにね。その子、その後はどうなったんでしょうね。

山田 その後、四国の大学に入ったんですね。

奥地 そう。親から離れたんですか？

山田 そうですね。でも、それからはわかりません。私からは、いっさい聞かないようにしているんです。向こうから報告があったら、「ああ、よかったですね」と返しますけど。ほかの方でも、「結婚しました」「孫ができました」「就職できました」「大学行きました」と聞けば、「ああ、よかったね」って言うんですけど、けっしてこっちは「どうされました？」って聞かないことにしています。気になっても。

奥地 そうね。そういうもんです。最後に、もう一言。

山田 ここ30年間くらいで、いい方向へ変わってきているけれど、不登校やいじめで死を考える子どもが減らないという状況であることは、まだまだ日本の教育の現場は異常なのだと思います。絶対に多様な学び方が、子どもに約束されていてほしいと思っています。

奥地 今日は、どうもありがとうございます。いまよりずっと不登校が理解されない時代に、下関の地に虹の会があったこと、会を続けてきておられることの意味が、よくわかりました。息子さんが不登校になられてからのご縁、そして、山田さんというお人柄のつむがれた30年間の心打たれるお話、ありがとうございます。

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて

「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに、「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌い」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校50年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事を無償で公開しています。ご寄付のほど、よろしくお願いします。

郵便振替口座：00100-6-22077

加入者名：全国不登校新聞社

一口 1000 円 / 3000 円 / 5000 円

不登校50年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>

#15 山田廣子さん

インタビュー日時：2016年10月29日

場所：ご自宅（山口県下関市）

聞き手：奥地圭子、木村砂織、山口幸子

まとめ：奥地圭子

写真撮影：木村砂織

記事公開日：2017年4月25日

編集・発行：全国不登校新聞社

© 2017 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）

〒114-0021 東京都北区岸町1-9-19

TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527

E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）

TEL:050-5883-0462

E-mail:osaka_c@futoko.org